

## 質疑応答

質問者①：工事や点検などで連続性が取れない場合のナビゲーションも必要だと思うが、どのように考えているのか。

講師（原田）：現状は、段差や経路などの静的なデータのみで構築しているため、工事や設備点検などの動的なデータはないが、必要だと理解している。データの取得方法と合わせて、どのようなフォーマットで構築するか検討していきたい。

質問者①：画像データも併用するとよいのではないか。

質問者②：車椅子ユーザーにはスマホなどの画面が反射して見えないこともあるので、音声機能もあるとよいと思う。また、特に手動車椅子ユーザーにとって勾配がどのくらいなのか、詳細な情報を提供できないだろうか。

講師（井上）：現状、音声案内には対応していない。他のプロジェクトで視覚障害者向けのことばでの案内を検討しているが連携できていない。なお、今回の実験は、アプリ開発というよりも得られた知見を整理し、ガイドライン化することで、新たにアプリを開発する民間事業者が活用してアプリ開発を行えるようにしたいと考えている。

質問者③：勾配度数は把握しているのか。

講師（原田）：歩行空間ネットワークデータとして集積しているが、今回の実証実験のエリア内には勾配の大きな経路が含まれていなかった。

質問者④：①ビーコンによる測位には正確性が欠けているので、現象分析を行ってはどうか。②今回は、段差回避のナビゲーションということであったが、そろそろ汎用性の高いものを根本から開発していくべきではないか。

講師（井上）：①ビーコンによる測位の条件については分析をしていきたい。②まずは、車椅子ユーザーが使えるナビゲーションの開発に特化し、いずれは視覚障害者向けのナビゲーションと連携したい。

質問者④：そもそも車椅子ユーザーにとって有用なデータと視覚障害者にとって有用なデータを一緒に積上げた方が効果的ではないか。

質問者⑤：このような取組みは、産学官の連携が重要だと思うので、学には先行研究は行われているのか。産には2020年以後、どのように活かしていくのかについて伺いたい。

講師（原田）：先行事例として、屋内のナビゲーションとしては、大阪梅田、名古屋セントラル、池袋、日本橋コレドなどがあり、バリアフリー案内としては、大阪梅田、日本橋コレドなどがある。

講師（須田）：今回の屋内外シームレスな段差回避誘導は、屋外、屋内と異なったデータおよび位置情報取得環境を連携させる試みとして他に類をみないバリアフリーナビゲーションとして目新しい。これまでは、バリアフリーマップや限定的なエリアの施設データがほとんどであった。今後は、データ集積のコストを考慮しつつ、どこまでのデータを集積すべきかの目安を決めていく必要がある。

講師（NTT データ）：今後は、社会基盤としてのインフラを構築していく。

質問者⑤：産学には、国土交通省のプロジェクトだけでなく、総務省、経済産業省、文部科学省などの取り組みを横断して、よいものづくりを行ってほしい。